

揺 = yureru =

深谷赤十字病院 清水 文孝



平成 23 年 3 月、春の帳(とぼり)が降りようとしているこの時期、麗らかな日々を覆すような大地震が東北を襲った。地震だけならば、この様な被害にはならなかったであろうに。地震後に訪れた巨大津波。何もかも呑み尽くすように、地を這い、ビルを破壊し、山を崩し、内陸まで到達した。その映像は、あたかも特殊撮影された映画を見ているようでもあった。この映像に、日本全国民がどれ程心(気持ち)を揺り動かされたであろう。そして、更に追い討ちをかけたのが原発の事故である。これは今後何年もかけ、終息に向かって対応して行くことになる。この様な中、揺り動かされたものは、これだけではなかった。私達が関与する各種学会が中止、先送りなどの対応をとる中、日本赤十字放射線技師会も揺り動かされたひとつとなっていた。

ほぼ震災後 1 ヶ月間、メール会議で学術総会開催についての議論を行い、全国理事会にてその結論を導き出すことになった。しかし、開催、中止、いずれにしてもなかなか決まらなかった。最終的に本社より出していただく施設への案内が出せないこと、まだまだ余震が続く中、東京直下型地震や東南海沖地震への引き金になり大地震が起きた場合、会員の安否の責任を負えないこと、この二点が最大の要因となり中止の決定がなされたのは言うまでも無い。その後、中止に伴った定期総会の対応を協議し、ホームページでの資料閲覧、紙面決済となったのは会員の皆様の周知の事実。そして、最も揺れたのは、揺れていたのは、私自身だったのかも知れない。2 月の常任理事会にて会長に推薦していただき、院内の稟議を経て推薦立候補。4 月の全国理事会の席上にて選挙管理委員会より当選が決まり、定期総会において所信表明を申し上げることで有ったが、これも儘にならない状況となった。これも私自身が、揺れたままでの新体制の船出になった理由のひとつとして上げられる。また、新たに就任していただいた役員の方々にも、この揺れは影響を与えてしまったのでないかと思われる。会長がしっかりしなければ、会の存続に影響を及ぼすであろうし、これまで本会を導いて下さった先達の皆様、特に益井前会長に申し訳が立たない。少しずつ心の軌道を修正し、役員の方々のバックアップのもと、今ではしっかりと大地を踏みしめられる様になって来ている。

平成 24 年を向かえ、学術総会の準備、定期総会の準備と各役員の皆様にはご足労をおかけするが、揺れ動いた一年が終わろうとする中、一緒に大地を踏みしめ行脚して行こう。

最後に、会を運営する私自身の持論を記させていただく。1 つが、「役員は会員のために何が出来るかを考え、会員は会の事業に積極的に参加していただく」。二つ目が、「会の活性化は、ブロックの活性化、分科会の活性化がその基礎となる」ということである。これからも、全国の会員各位のご意見をいただきながら、一歩ずつ、一歩ずつ、牛歩ではあるが会の運営を担って行きたい。